

この本、
いかがですか？

“一人で頑張らなくていい、 学び合う場があることを教えてくれた本”

評者

宮下ルリ子

県立広島大学 助産学専攻科 准教授

皆さんは「ファシリテーションとは？」と聞かれたら、どのようなことを想像するだろうか。私が助産教員として初めてこの言葉を聞いた時、英語の「facilitation」＝「円滑化、促進」は理解していたが、正直なところ「ファシリテーターは難しそう、できそうにない、何をしたらいいかわからない」という、漠然とした不安を抱いていた。そんな時、本書の著者が主催するセミナーの中で、「ファシリテーターは助産師に例えられる」というひと言があり、すっと腑に落ちたことを今でも鮮明に覚えている。

助産師は、全てのライフステージにおける女性とその家族への支援をする専門職である。しかし、多くの人がイメージする助産師の仕事とは、出産に立ち会い、産婦と生まれてくる赤ちゃんへの支援だと推察される。分娩介助における基本的な支援技術の目標の一つに、「分娩に対する産婦とその家族の満足度が得られる介助支援であること。つまり、産婦自身の主体性を重視し、『産ませてもらう』意識から『産む』実感が得られるようにすること」¹⁾がある。すなわち、あくまでも主役は産婦と赤ちゃんであり、助産師の役割は分娩時におけるファシリテーターなのである。分娩が安全かつ円滑に進行するよう、そして助産師が赤ちゃんを産ませるのではなく、産婦が持つ力を引き出し自ら産めるよう主体性を促す支援が助産師の仕事なの

だ。

私は以前、助産師として医療現場で働いている時、リーダーが強い指導力でスタッフを牽引する「先導型リーダーシップ」を経験している。そのためか、臨床経験を積むほど、「後輩へ教えなければいけない。分からないことを聞けない」、そんな日々を過ごしていた。皆さんもこのような経験はないだろうか。本書の中に、「ファシリテーター型リーダー」とは、「愛を持って見守る人」というフレーズがある。今までイメージしていた「立派で強いリーダー」ではなく、かつ「自分一人で頑張らなくていい」というメッセージがこのフレーズから読み取れ、ふっと肩の荷が下りた気がした。そこには、人やプロセスを信頼し任せること、それが結果的に自律性・主体性を育むことにつながり、「互いに学び合うこと」の重要性が述べられていた。

これは、日々の仕事に活用できるのではないだろうか。例えば、妊婦健康診査時の健康教育において、助産師は妊婦に対して日常生活や妊娠経過で起こりやすいこと、注意することなどを話す機会があると思う。その際に、助産師が妊婦に「教えること、伝えたいこと」を一生懸命になって話すのではなく、「一緒に考える、学ぶ」といった思考で介入・支援ができると、ファシリテーターとして関わることができそう

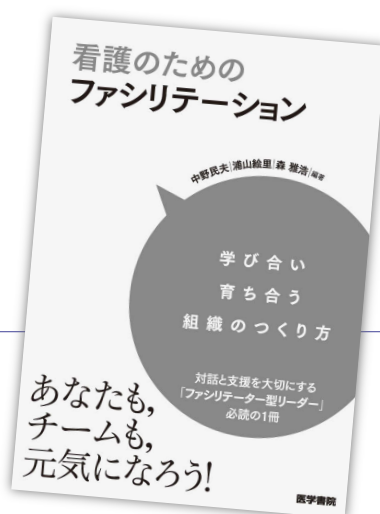
だ。

看護のためのファシリテーション 学び合い育ち合う組織のつくり方

中野民夫／浦山絵里／森 雅浩 編著

本体 2400 円＋税

A5 判／医学書院／2020 年



このように、助産師は日頃からファシリテーターとして活躍していることをまずは認識し、本書を手に取り、日々の支援と置き換えながら読み進めることを、ぜひお勧めしたい。 **J**

【参考文献】

- 1) 佐藤喜根子：分娩介助の意義・原理. 我部山キヨ子, 武谷雄二(編集)：助産学講座 7 助産診断・技術学Ⅱ [2]分娩期・産褥期 第5版. 医学書院, 92, 2013.